UK x JP
2017

How do we want to shape our future?

日英学生会議報告書

6-14th September 2017 @ Tokyo, Japan

Unite Knowledge,

Join Passion.

日英学生会議
UK-Japan Student Conference

目次 – Index –

1.	日英学生会議の理念	– Mission of the UK-Japan Student Conference –	3
2.	本年度のテーマ	– Internationalism, Isolationism, Immigration –	4
3.	プログラム構成	– Programme Structure –	5
4.	開催要項	– Conference Details –	7
5.	実行委員・参加者名簿	– Organisers and Participants –	9
6.	事前学習	– Preliminary Learning Sessions –	10
7.	本会議	– Conference Agenda –	12
8.	終わりに	– Epilogue –	20

1 日英学生会議の理念

Mission of the UK-Japan Student Conference

私たちは、日英両国の将来の担い手である学生同士の交流と議論の場をつくることにより、両国学生が社会で活躍する際に礎となる人脈形成を支え、学生の側から日英間の交流を活性化したいと願っています。将来に開けた可能性をもち、利益や地位に依らない交友関係を築くことのできる学生期に得られた絆は、生涯にわたり生きてくる宝です。一期一会の出会いから始まった交友関係がきっかけとなり、人生や価値観に転機が訪れるということもしばしばあります。日英学生会議は、日本やイギリスというそれぞれ内部で完結しがちなコミュニティーをまたぎ、こうした「出会い」を媒介する懸け橋としての役割を担い、双方の学生の人生に大きなインパクトを与える可能性を秘めています。

私たちは、日英という異なるバックグラウンドをもつ学生同士が議論することを通じて、潜在意識に眠る自分の先入観やバイアスを問い、多角的なアプローチに気づく、という体験を重視しています。この体験は、国境を超えた舞台で幅広い視野をもって議論できる個人の形成にとって、かけがえのないものです。私たちは、自由闊達にとことん語り合うというこの風土を、会議期間・会議場内に終わらせず、是非とも学生各人に自国のコミュニティーに持ち帰ってもらい、こうした「気づき」の体験を日英学生会議の外に伝えていきたいと考えています。私たちは、「自由闊達な議論」→「気づき」→「アウトプット」というプロセスのモデルとして、日英学生会議を創設することを志します。

日英学生会議は、日本とイギリスにおける、グローバル志向で政治や社会への関心が高い学生が一所に集う、希少な機会を創出します。日英二大国の将来を担う学生たちが、アイディアを共有し、持続的な社会の実現に向けてのヴィジョンを提言するという営みは、それにより得られる知見においても、次世代のリーダーとしての学生の成長においても、両国の将来にとって貴重なものです。日英両国の学生という、これまでなかった視点を開拓することは、次世代を見据えた政策や取り組みの構想が芽生える土壌となり得ます。この新たな価値を充分に活かすべく、私たちは学生会議の成果を公表し、フィードバックを通じて社会に還元いたします。私たちは、日英学生会議が、日英間の豊かな交流と議論の源泉となることを願っています。

2 本年度のテーマ

Internationalism, Isolationism, Immigration

2017 年日英学生会議では、”How do we want to shape our future?”と題し、国際主義と孤立主義の狭間としての移民と移民に関わる問題に焦点を当てます。移民の歴史、移民問題の現状と背景を分析し、どのような移民政策や取り組みが有効かを論じます。

この一年、イギリスの EU 離脱、アメリカ大統領選、極右政党の世界各地での台頭と、「移民政策」が焦点となる社会の流れが多く見受けられました。社会階層、民衆の投票行動など様々なビッグデータが分析の対象とされ、今後の社会情勢、人々の意思決定の予測が急速に進んでいます。しかしながら、社会をモデル化可能な集合体として扱うがゆえに、「社会の中に生きる個人」としての意思決定、個人間での交流、そのコンテクストといった視点が欠落し、より立体的、多次元での社会構造の把握、そして構造の中での真の対話が喫緊の課題と私たちは懸念します。

コスモポリタニズムを追求してきた EU 連合の一翼を担い、そして離脱を決めたイギリス。「人の移動」「国籍」といった概念において慎重な姿勢を取りつつも、最近打ち出された移民政策の動向が注目される日本。この両国がもつ、歴史的・文化的背景、様々な国内問題、固有の事情を踏まえた上で、今後の国際社会における両国の在り方、互いの将来のヴィジョンを共有することが重要であると、私たちは確信します。混沌とした国際社会において、大国である日英両国は何を求め、何を求められているのか。日英学生会議は、この問いをめぐり、社会的・政治的な制約に縛られない学生として自由闊達に議論をしてもらうことに照準を定めます。私たちは、日常的には接することの少ないであろう、他の参加者との関わり合いと意見交換のなかで、価値観の多様性に目を向けてもらえるようなプログラムの提供を目指します。また、本会議期間の学生同士、会議内外の交流からさらに、今後も続く本会議への参加者コミュニティーの存続に向けて継続的に取り組みを行います。

本会議では、事前学習による知識と、専門家の講演によるインプットをきっかけに、日英両国の大学生とのディスカッションやプレゼンを通じてアウトプットを行います。日英両国の「移民」の特徴と課題点を、多角的な視点で炙り出していく、濃密な一週間となることを期しています。

3 プログラム構成

Programme Structure

日英学生会議は、異なるバックグラウンドをもつ両国の学生が多角的なアプローチから意見やアイディアを共有するなかで、幅広い視野をもって思考する力を養成することを目標とします。この過程で自由闊達な議論はきわめて重要です。我々は、参加者全員が積極的に議論に参画し、意見交換や発表を通して、セミナーやワークショップを通して得た学びを発信できる環境づくりを重視しました。

事前学習

参加者全員が移民に対する一定の予備知識を持って本会議に臨むべく、事前学習課題および勉強会を開催しました。移民についての理解を予め深めることで、参加者が積極的に議論に参加し、論理的に自分の意見を構成して他者の議論を分析する力を養成することが目的です。今年の事前学習はイギリスと日本でそれぞれ少人数のグループに分かれ、計 4 回開催されました。それぞれのトピックは第 1 回「移民とは」、第 2 回「移民と文化的多様性」、第 3 回「移民とグローバル経済」、第 4 回「政策について」でした。また、最後の勉強会の後は本会議の最初に行われる導入プレゼンテーションに向けての準備を行いました。このプレゼンは、「移民」についての一定の知識を有しつつも、各国固有の移民問題とその社会的・文化的背景には通じていない相手国の参加者に向けたものです。

セミナー

今年の本会議では 3 つのセミナーが開催されました。これらのセミナーは移民問題を専門とする機関の方と大学教授の方によるもので、この会議における貴重なインプット源のひとつです。各セミナーの前半では、移民問題を論ずる際に議論の礎となる概念や発想、知識のコアを提供しました。後半は「リベラルでアカデミックな議論の場をつくる」という本会議の目的を果たすべく、それぞれのトピックについてさらに発展したディスカッションや質疑応答を行いました。国際移住機関 (International Organization for Migration) 東京事務局の清谷様、東京大学 Center for Global Communication Strategies 特任准教授の Dr Andall, 同じく講師の Dr Hallman にご登壇いただきました。

ワークショップ

ワークショップは、参加者が主体的に自分のアイディアを提示し、データ解析や調査をグループ活動として行うインタラクティブなセッションとしての役割を持ちます。また、今年はさらにバラエティに富んだワークショップが企画され、本会議では 4 つの異なるワークショップが行われました。株式会社フラミンゴ様をお迎えした「多文化共生社会」についてのディスカッション、日英両国に共通する移民問題についてのディベート、去年も好評だったアイディアコンテスト、最終日に行われたまとめワークショップが本年度の会議のワークショップとして行われました。

文化交流会

文化交流会は会議の理念の軸でもある日英両国の将来の担い手である学生同士の交流を深めるために行われ、今年も大盛況に終わりました。議論を交わす仲間でありながら、文化交流を行うことで学生同士の関係はより親密なものになりました。今年は、伝統的な習字体験はもちろん、浴衣や制服を着るという日本ならではの体験が特に人気でした。他にも、数独や折り紙、福笑いや百人一首を用いた坊主めくりなど様々な文化が紹介されました。

プレゼンテーション

プレゼンテーションはこの会議を通した学習体験のコアを形成します。発表の場にて、参加者各々は会議を通しての学習を意識的に咀嚼し、主要な論点と解決の指針を引き出すことを挑戦されます。

事前学習の中では導入プレゼンの準備が行われ、初日に日英両国お互いに与えられたトピックについて自国の現状や問題点の分析から解決案の提示までをグループごとに発表しました。

最終プレゼンテーションは本会議の学びを通して準備され、両国の「移民」の現状と原因を総括し、グループごとに挙げられる問題とそれに向けての解決策を提示するものでした。

各グループの発表ごとに参加者全員が内容を理解し、それに対する意見や質問を共有することができるようなグループディスカッションの時間が 15 分程設けられました。

4 開催要項

Conference Details

開催スケジュール

開催日時：2017 年 9 月 6 日（水）～ 2017 年 9 月 14 日（木）

	Sep 6 (Wed)	Sep 7 (Thu)	Sep 8 (Fri)	Sep 9 (Sat)	Sep 10 (Sun)	Sep 11 (Mon)	Sep 12 (Tue)	Sep 13 (Wed)	Sep 14 (Thu)
		Breakfast	Breakfast	Breakfast	Breakfast	Breakfast	Breakfast	Breakfast	Breakfast
9:00 AM	Arrivals	Introduction Ice breaking	Seminar by Prof. Andall	Seminar by Prof. Hallman	Workshop	Seminar by Mrs Kiyotani	Workshop	Group Preparation	Wrap-up Workshop
10:00 AM		Presentation & Discussion						Presentation A	
11:00 AM							Group Preparation	Presentation B	
12:00 PM		Lunch	Lunch	Sightseeing	Sightseeing / MTG for Route H	Lunch	Lunch*	Lunch*	Lunch*
1:00 PM		Presentation & Discussion	hop withFlami			Idea Contest	Group Preparation	Presentation C	Departure
2:00 PM								Presentation D	
3:00 PM			Reflection		Route H Exchange with Japanese High School Students / Cultural Exchange Preparation	Reflection	Check in	Reflection	
4:00 PM	Ice breaking	Reflection					Cultural exchange	Closing	
5:00 PM		Free time	Free time			Free time	Group Preparation / Free time	Free time	
6:00 PM								Farewell Dinner / Karaoke	
7:00 PM									
8:00 PM	Dinner	Dinner	Dinner (KOMAD)	Dinner	Dinner	Dinner (MONJA)	Dinner (南国亭)		

開催場所

National Olympics Memorial Youth Center

〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町 3-1

http://nyc.niye.go.jp/

講演者

IOM

国際移住機関（IOM）は移民個人への直接的支援、移民に対する地域協力の促進、移住調査など、移住関連の様々な課題の解決を人権と尊厳に基づき進めています。今回は東京事務所の清谷典子様にお越し頂きました。清谷様はソマリア、ルワンダなどの紛争地に勤務され、プログラム管理や緊急援助事業等での経験を得た後２０１３年に現在のポストに着任されました。

フラミンゴ

株式会社フラミンゴは２０１５年の創業以来、外国人向けの労働環境の作成を目標に街中で日本在住の外国人から言語レッスンを受けるマッチングサービスを提供しています。登録講師数は５００名を突破しており、既に１万を超えるレッスンを成立させています。英語だけに留まらず仏語、独語、中国語、露語等３８言語をサポートしています。

Candler Hallman

ホールマン•キャンドラー氏は東京大学のグローバルコミュニケーション研究センター（Center for Global Communication Strategies）講師として平和学を教える傍ら学生へライティング指導をされています。最近の研究は北アイルランドとアメリカにて２年間行った現地調査をもとにしたテーマで、文化的、言語学的な人類学者として北アイルランドでの和平プロセスの研究をされています。

Jacqueline Andall

アンダル・ジャクリーン氏はスイス、ジュネーブにある国際・開発研究大学院の研究員、英国バース大学にて客員研究員を経て、現在は東京大学グローバルコミュニケーション研究センター（Center for Global Communication Strategies）特任准教授をされています。専門は現代の移民問題への研究を軸とし、その中でも特に欧州、労働、ジェンダーに特化した移民研究を行っています。ノッティンガム・トレント大学にて博士号を取得されています。

協力

主催　日英学生会議実行委員会・一般社団法人 Bizjapan
後援　在日英国商工会議所・日英協会
協賛　株式会社 ベネッセコーポレーション
グレイトブリテン・ササカワ財団
双日国際交流財団
三菱 UFJ 国際財団

5 実行委員名簿

Organisers

実行委員・協力委員一覧

松崎可鈴	King's College London
石田秀	University of Oxford
石井大智	慶應義塾大学
直田彩加	Royal Holloway, University of London
奈須野文槻	東京大学
鈴木康之亮	慶応義塾大学
野口奈央	University of Bradford
近藤希望	東京大学
大矢聡美	University of Southampton
柴田尭彦	早稲田大学
南若葉	慶応義塾大学
Beth Barker	University of Cambridge
Eugene Lin	University of Oxford
Jiawen Pek	Durham University
Theo Keeping	University of Oxford

6 事前学習

Preliminary Learning Sessions

本会議の準備として計４回にわたる事前学習会を実施しました。今回は、テーマが「移民」と規模が大きかったことに加え、専攻やバックグラウンドが多岐にわたり、多様な引き出しを持った参加者が多かったため、事前準備にさらなる重点を置きました。主に、内容に関しては移民について幅広く、かつ多角的なアプローチを目指し、形式的には少人数のグループで個人が積極的に参加することのできる環境づくりを徹底しました。それぞれの内容については以下の通りです。

第１回勉強会「移民とは」

移民問題について議論する前の導入編として、第１回では移民について大きく取り上げました。主題は、移民とは何か。第１回のねらいは大きく分けて２つあり、ひとつは本会議に向けて移民問題がいかに複雑であるかに気づき、理解すること。２つ目は異なるジャンルをリサーチし、多角的なアプローチを試みることにより、自らの移民問題への関心に幅をもたせることでした。

初回の事前課題は、自分の考える移民の定義から始まり、各国の政府やアカデミアの現場において移民という言葉がどう使われているのかについて考えました。また、国際連合や国際移住機関（IOM）といった世界規模で名の知れた機関の間でも、それぞれ移民の定義が異なるように、移民の定義は未だ国際的に一意に定まっていません。例えば、１９９７年の国連事務総長報告書の定義によると「移民」とは「通常の住居地以外の国に移動し、少なくとも１２ヶ月間当該国に居住する人のこと」を意味します。この定義はどこまで有効なのか、定義の幅をどこまで持たせてよいのか、狭い定義と広い定義の強みと弱みはそれぞれなにか、など様々な疑問点を各グループでディスカッションをしました。各自が持ち寄った事前課題をすり合わせる中で、自分が考えていた「移民」の定義よりも現実は複雑だったという意見が多くのグループで出ました。

第２回勉強会「移民と文化的多様性について」

第２回では移民問題で欠かせないテーマである文化的多様性について考えました。事前課題では、主に昨今話題になっている論点についてグループごとに議論しました。まずは、多文化主義による国家への帰属意識の喪失（National Identity Crisis）について。これはグローバル化された社会で形成されてきた多様性から生み出されたものであり、地域や民族・国家ごとの分裂や争いに発展するだけでなく、それらが次の世代に引き継がれるという負のサイクルが起こることも課題であるという意見が出されました。また、移民の受け入れ国にとって、自国の文化をどこまで守り続け、どこまで多様性を受け入れるべきか、という問いへの答えは、どちらにも長所と短所がある上に、時代や各国の文化的価値観によっても異なるため、一つに定まるものではないということを認識しました。

また、移民と受け入れ国民の双方が、互いの文化や言語、宗教の理解に努めることが、移民が成立する前提ではないのかとの意見が出ました。文化の多様性を形成するという点でメディアの役割とは何か、などグループごとに深く具体的な領域まで議論しました。

第 3 回勉強会「移民とグローバル経済」

移民が経済にもたらす影響は日英両国だけでなく、グローバル化が進む世界にとっても大きなテーマです。今回のメインテーマである移民が経済にもたらす影響から議論を始め、労働問題や労働政策など更に発展したテーマを学習しました。とりわけ、日英両国で直面している少子高齢化問題の解決策として労働者としての移民を受け入れるか否かという論点については、事前学習のみならず、本会議でも活発な議論が交わされました。

さらに発展テーマとして人権問題を取り上げました。果たして現在、移民は平等に扱われているのだろうか、という問いには、雇用の観点からみて、自国の労働者と移民労働者（外国人労働者）の労働条件や待遇の格差問題についての改善が必要であるとの意見が多く出ました。日本で行われている外国人技能実習制度は、一見国際的な貢献に見えるが、制度に関しての明確な法律や制度自体を管理する公の機関もなく、人権侵害の温床になっているという意見もでました。一方、移民としても、相手国の文化や言語への理解、または理解を試みるという姿勢が必要だということを念頭に置くべきであるという意見もありました。

第 4 回勉強会「政策について」

最終回では、政府レベルとコミュニティーレベルの両方から、移民と難民の政策について考えました。特に、新しい移民政策に関して何を優先すべきか、という問いに多くの意見がでました。そのうちのひとつに、移民とその地域での社会的な融合に関する政策を優先すべきという考えがありました。移民とその地域に住む人々の居住地域などの都市計画の見直しや、異文化理解を推進するなどといった対策によって、異なる文化への無知からくる不安や差別などが減少しやすくなるということも考えられます。

政策を立てる前に日本社会全体で移民受け入れ体制を整えることを優先すべきであるとの意見も出されました。移民を受け入れる責任を理解せず受け入れても、さらなる混乱を招くからです。それを防ぐための提案として、まずは国外からの医者などの高度な技術を持った労働者の受け入れを試行する期間を設けてみるというアイディアが出ました。ただ、移民問題解決にそのように多くの時間を割くことができるとは限らないので、短期的、長期的な解決策のどちらをも考える必要があるということを忘れてはなりません。

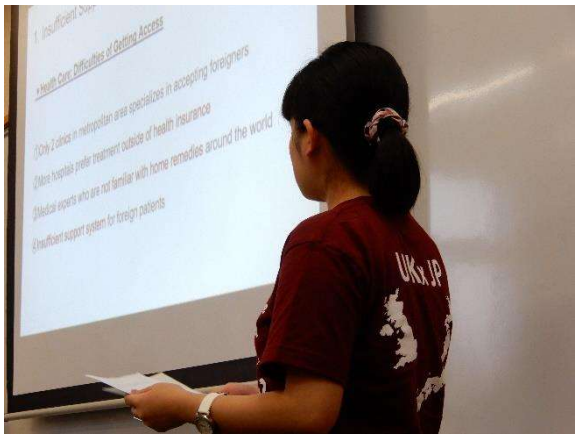
最後の勉強会を終えてからは本会議の最初に行われる導入プレゼンテーションの準備を進めました。

7 本会議

Conference Agenda

導入プレゼンテーション

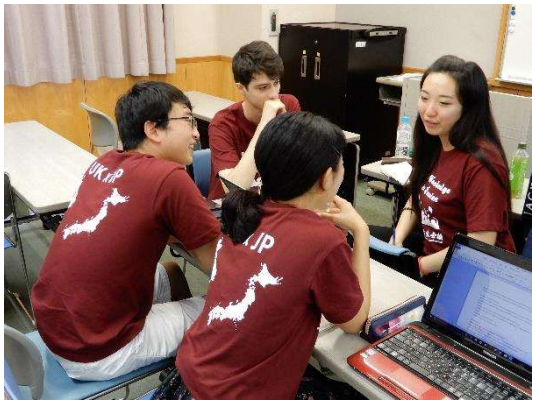
7th Sep 9.45am - 4pm



事前学習で取り扱われた中から抜粋されたトピックで、「移民の概要」、「社会的融合と同化＋人権」、「経済＋安全保障」について日英それぞれ発表しました。

グループＡは移民の概要についてでした。移民の定義は「合意された１つの定義はない」とし、人々各々が深く考えることが大切だと主張しました。続いて移民の歴史についての発表があり、移民大国と言われているイギリスの奴隷貿易や２つの世界大戦など様々な歴史がとりあげられました。

グループＢは社会的な融合と同化、および人権について。イギリス側と日本側双方による発表でした。イギリス側の発表では、移民の社会的な融合は大きな課題であるとされ、とりわけアイデンティティクライシスはこのような問題をさらに難化させるだろうと述べられました。人権に関しては、１９９８年人権法や欧州人権裁判所（ＥＣＨＲ）を引き合いに、欧州をはじめとした移民受け入れ先進国とされるイギリスの取り組みが挙げられました。日本側からは移民の日本社会における医療と食という２つの問題点が例に挙げられ、多くの医療機関では海外からの患者を受け入れる体制が整っておらず、食に関してもハラル料理やベジタリアン等の多様性への配慮が必要とされるとの考察が発表されました。日本での人身売買については、文化に根付いた問題として政府レベルでの改善を必要とし、日本政府だけでなく他の国や機関との連携が提案されました。



グループＣは日英両側からの移民に関する経済＋安全保障について。イギリス側の発表では、主に移民問題が懸念された Brexit と失業率の関係性に注目したが離脱前後で変動がないのが現状であるとされ、国民の意識と事実に差があることが述べられました。国の安全保障問題として、テロリズムや難民問題についても言及されました。日本側は、自国の政府の難民受け入れの少なさを指摘し、日本社会全体として多文化理解の欠如が原因の一部であると分析しました。経済面では移民問題でよく議論される少子高齢化と雇用問題について言及し、短期間での解決策にしかならないのではと考察しました。

移民問題解決は国際社会の一員としての義務であるとされ、どのトピックにも英両国の共通した解決策が多数提案されました。特に、移民側と受け入れ国側、双方の努力が必要だということと、政府だけに頼るのではなく、地域レベルでの解決にも力を入れていくべきとの考えに至りました。

Dr Andall によるセミナー

8th Sep 9am - 12pm

本会議最初のセミナーには、東京大学 Center for Global Communication Strategies にて特任准教授をされている Andall 氏をお招きし、２部構成で行われました。前半は Andall 氏の研究テーマのひとつである労働移動について、特に、技術力の低い人(low-skilled labour)の移動についてのレクチャーから始まり、後半にはいくつかの議題に関して全体で議論しました。

近年では、国際間でのものやお金が以前より流動的であるだけでなく、経済面でのグローバル化がさらに急速に進んできました。そんな中、労働移動も例外ではありません。国際的な人の移動、特に労働という生産要素の国境を越えての移動は、経済や社会だけでなく、政治や文化など様々な側面を持っているため、どの観点から考えるかにより使われる定義やセオリーが異なります。しかし、Andall 氏はこれらの多くの場合である共通の段階を経ていると述べられました。その段階とは、初めは自国に生活基盤を置きながら発生する一時的な移動、そしてその期間が延長され、家族がそこに集まることにより生活基盤が移り、最終的に永住するというものでした。他にも、新古典派や二重労働市場論、新しい労働移動の経済論などがいくつか紹介され、それぞれの枠組みから労働移動について考えました。

後半では、イギリスにおける大型チェーン店であるプレタ・マンジェのケースワークを取り扱いました。Brexit によりどう雇用が変化したかということと、今後のイギリスの雇用について議論しました。イギリスにおいてチェーン店で働こうと思っている人５０人のうち、イギリス人の割合は一人にとどまり、今回の離脱がイギリス国内での雇用問題に与える影響の深刻さについて学びました。全体での議論ではＥＵ離脱だけではなく職業に関しての社会的な地位への偏見問題など、多元的な解決策が望まれるという意見が出ました。

Flamingo によるワークショップ

8th Sep 1pm – 3pm

１時間を通したワークショップの中で、いくつかの議題を通して積極的な議論が行われました。日本に滞在する外国人は幸せを感じているか、という質問も行われ、議論の中では「幸せとは何か」といった問いが出ました。幸福の議論については人それぞれ様々な意見があり、答えは一つではありません。しかし、不自由なく生きることを幸せと定義した時、何が必要か、またそれらは日本に在留している外国人にとって容易に手に入るものであるだろうか、安全や豊かさ、自由、市民社会、など様々な視点から「幸せになるためには何が必要か」を定義し、どのようにしたら日本人も外国人も共存できるようになるのかを考えました。

日本の大学に海外からの留学生をさらに招き入れるにはどうしたらいいか、という問いに対しては、日本の先進技術についてアジア以外の地域へ向けてもっと情報を発信するべきではないか、等という意見が参加者から出ました。他にも、イギリスを含めた欧州における日本のイメージは未だに漠然としており、アニメや漫画、ファッション等のポップカルチャーの影響が強い、といった声も聞かれました。それらを踏まえ、日本は今よりも更に日本の研究、技術力の強さを国際社会にアピールすべきだという結論に至りました。

フラミンゴは学生、または卒業して間もない若者によって運営されている株式会社で、外国語を学びたいと思っている日本人と世界中から日本に来た外国人を繋げるプラットフォームを提供しています。理念として日本人と外国人の共存を目指しており、その点において、今回移民をテーマとした学生会議を行っている我々にとってフラミンゴとのワークショップは大変印象深いものとなりました。他のワークショップ・レクチャーが大学の教師によるものであるのと比べ、年齢の大きく離れていない人々の運営による会社との議論は刺激的なワークショップでした。

Dr Hallman によるセミナー

9th Sep 9am - 12pm

東京大学 Center for Global Communication Strategies にて講師をされている Hallman 氏をお招きし、３時間に及ぶセミナーが開催されました。今回のテーマは北アイルランドを例に出した、民族の融合と対立（Integration and Ethnic Conflict）についてでした。

北アイルランドでは１９２０年頃の独立の際から対立が起きていましたが、それ以降も１９６０年から７０年代に対立が激化し、和平交渉へ長い道のりを歩んできたという歴史があります。宗教改革以降にはイギリスがプロテスタントの国に、アイルランドはカトリックの国になり、これら２国間での宗教的な対立を生みだされました。

「プロテスタントによるプロテスタント国家」としてカトリック教徒と対立していましたが、その中でも１９７２年１月に起こった血の日曜日事件はさらに対立が激化したひとつのきっかけであると取り上げられました。様々な暴力が行使され続けた北アイルランド紛争。そんなイギリスと北アイルランドの歴史や異なる文化が及ぼす移民への影響を考えました。

イギリスにおける難民申請者についても紹介されました。２０００年代初めから難民が増加したことによる社会的な融合（Integration）への課題として、異なるエスニシティや文化、宗教への配慮から教育制度などの社会構造的な課題も紹介されました。とりわけ、亡命先を求める人々にたちはだかる問題について北アイルランドにおけるコンゴ人コミュニティーを例にあげられました。このような実際の国際的な問題について日本とイギリスの学生たちが理解を深める貴重な機会になりました。

高校生交流会 – Route H 共同開催

10th Sep 4pm – 7pm

日英学生会議をスポンサーしていただいている Route H と、「英国トップ大生と高校生の交流会 2017」と題した交流会イベントを共同開催しました。イギリス大学生 14 名と、イギリス留学に関心のある日本の高校生 12 名が参加しました。日英学生会議実行委員の留学生メンバーからはじめに、イギリスの大学受験と大学生活を紹介しました。ロイヤル・ホロウェイ大学、オックスフォード大学、キングス・カレッジ・ロンドン、ブラッドフォード大学の 4 名がプレゼンテーションを行い、イギリスの授業形式、各々が参加している課外活動、奨学金、留学で得た学びなどについて話しました。

その後、日英学生会議のイギリス側参加者を交えて、あらかじめ高校生側から出されていた質問へ答える形でパネルディスカッションを行い、イギリスの大学への入学方法やオックスブリッジの特徴、イギリスの大学の良いところ、苦労した点などについての質問が挙がりました。また、パネルディスカッションで答えきれなかった質問を、その後 1 時間程度の個別ディスカッションで受け付けました。今回の企画が高校生たちの海外進学の手助けになれば幸いです。

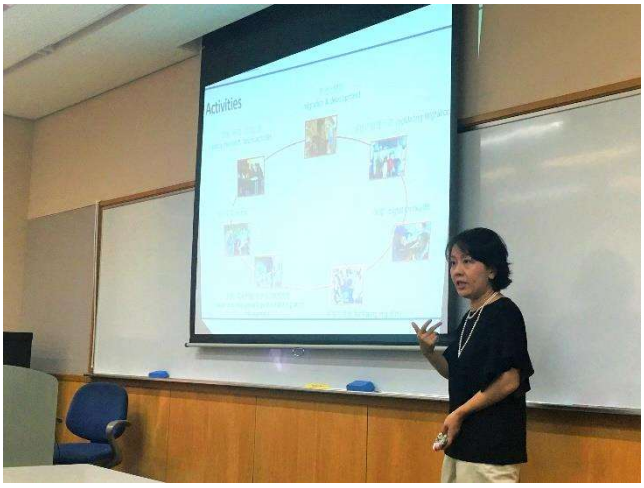
IOM 東京事務局清谷様によるセミナー

11th Sep 9am - 12pm

今年の本会議最後のセミナーでは「現在の国際的な人の移動問題について」と題し、IOM 東京事務局の清谷氏をお招きしました。「人の移動」は国連の持続可能な開発目標で取り上げられ、２１世紀における重大な課題のひとつと言われていますが、世界の人口７０億人のうち、国境を超えるものもそうでないものも含めると１０億人が移動している計算となり、実際はとても身近な話題であることが紹介されました。そのうち生産年齢である人が７４％で、女性が４８％程とされていて、先進国と言われている

国々の平均した移民年齢が高いことが分かっています。

移民問題に取り組む際で大切な移民の定義について IOM と国際連合という大きな機関でも定義は異なることは多々あり、国際的に認められた定義は存在しないと述べられました。人の移動は様々な要因によって起こるため、移民という定義や枠組みでは正確に分けることができないのです。IOM は世界的な人の移動の問題を専門的に扱う機関として唯一の国連機関であり、その活動は多岐にわたります。



グローバル化された社会ではものだけでなく人や情報の移動も安価で簡単になったこともあり、社会的弱者とされている女性や子供をターゲットにした人身の密輸も問題視されています。この解決には法的措置や国際社会としての協力が必須となっていることが紹介されました。長い間 IOM では人身売買問題への取り組みも行っています。これら搾取の目的は強制労働と性的搾取がほとんどの割合を占めていることが明らかになりました。

最後に紹介されたのは人の移動と気候変動でした。環境が要因の人の移動や移住は突然だが時間をかけて起こることが多いと分析されています。人の移動とは解決されるべき問題ではなく、管理されるべき現実であるとの主張は現実的で学生の我々にとってはインパクトの強いものになりました。実際に第一線で活躍されている方からのエネルギーに満ちたレクチャーには多くの学びがありました。

アイディアコンテスト

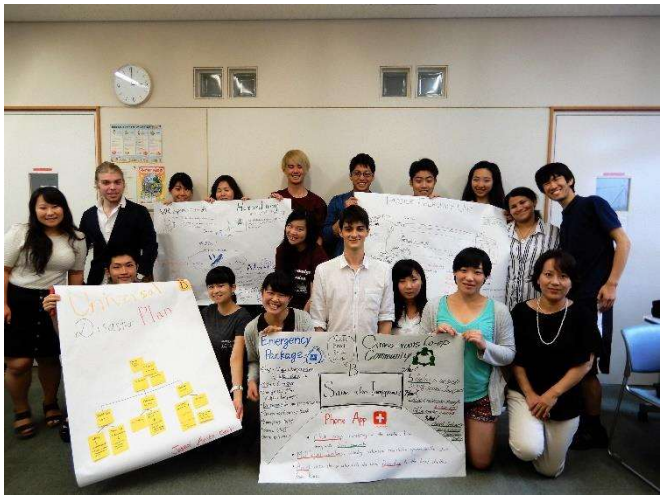
11th Sep 1pm – 3pm

清谷氏のご参観のもと、アイディアコンテストを行いました。今回のコンテストのテーマは、特に移民が困難に直面するであろう大災害やテロ攻撃など危機的状況において、移民の立場を守るための「効果的」で「現実的」かつ「創造的」なプランを立てることです。参加者は 4 グループに分かれてアイディアを 1 時間かけて練り、模造紙を使ってグループごとにプランをプレゼンするという、ピッチ形式のコンテストを行いました。

A 班は、弱者である移民が危機においてターゲットになりやすいと考え、テロ攻撃や災害時も安全かつ、シェルター、水や食料、医療機器、人工衛星通信、言語面での支援などが完全装備された大型トラック”Mobile Emergency Unit”を提案しました。

B 班は、”Save the Immigrants”と題して、移民を包括的にサポートする 3 つのプランを提示しました。第一に、ハラルや菜食主義者にも配慮した食料などの物資、充電器、非常用トイレ、多言語避難マップ、多言語辞書、緊急連絡先帳などを詰め合わせた”Emergency Package”の支給。第二に、”Grass-roots Co-op Community”と名付けた、地元に移民家族・現地家族混合の 5 家族 1 グループのコミュニ

ティーを作り、毎月情報共有を行って結束を図るというもの。第三に、モバイルアプリにて、緊急アラームを知らせ、地元のグループで通信を図るもの、という三つの構成要素で提案されました。



C 班は、津波災害の実態を移民に伝えようと、VR を使って津波体験を提供するプランを提示しました。体験には、津波が起きた際にどう行動すべきかといった実践も含まれます。また実際に津波が発生した場合には、多言語による実況アナウンスやハザードマップも供給します。

D 班は、地震やハリケーンなどの自然災害の対策のために、様々な組織がどのように行動すればよいかという包括的なプランを提示しました。プランを医療部門、教育部門、福祉部門に分け、その中でさらに具体的な対策を提案しました。

それぞれのグループが発表したあと、清谷氏から各グループに対してフィードバックをいただきました。優秀賞は B 班に与えられました。

ディベート

12th Sep 9am – 11am

１２日には、「少子高齢化社会において、多くの移民を受け入れることは経済の活性化に繋がり、国際的な競争力を維持することに繋がる」という言明について、肯定派と否定派に分かれてディベートを行いました。各々のチームは丁寧にかつ、情熱を込めて自身の主張を行い、時に激しく迫合いました。肯定派の論点は移民の持つ多様性が経済的にポジティブな影響をもたらすという視点に重きが置かれました。様々な言語や文化が入ってくることにより、もたらされる社会への新しい変化に注目し、長期的な視点での移民を受け入れることによる少子化問題解決への手がかりも話し合われました。

否定派からは、移民を受け入れる以前に自国が苦戦している問題（例：教育や福祉、セキュリティ問題）に関してきちんと対処出来るのか、という意見が多く出されました。他には、日本観光の魅力のひとつである伝統的な日本文化が移民によってもたらされる多様性により変化してしまうのではないかという懸念もあります。最後には肯定派と否定派のそれぞれ自分のチームが考えていた論点について、自らで反論して理解を深めるエクササイズを行いました。ディベート時に自分の論点について深く考えることは主流ですが、それらを批判的に考え直すことで多角的に考える良い機会になりました。

文化交流会

13th Sep 3.30pm – 4.30pm

翌日に最終プレゼンテーションを控えるなか、が息抜きも兼ねた文化交流会を開催しました。日英学生会議が学術交流のみならず、一週間を通しての参加者同士の深い相互理解の場であることに私たちはこの会議に固有の価値を見出します。

日本文化体験と聞いて皆さんは何を思い浮かべますか？昨年同様、習字や浴衣、折り紙体験は大人気でしたが、今年は日本文化に精通しているイギリス側の参加者も多かったため更にバラエティに富んだ企画を用意しました。例えば、最近世界各国で「Sudoku」として知られている数字のパズルゲーム、数独。特定の言語を要せずに楽しめるため、現在もイギリスにおける人気は健在のようです。その他にも、日本の高校の制服はアニメでしか観たことがないというイギリス側の参加者も多く、試着したり写真を撮ったりして盛り上がりました。

このように長期にわたる友情関係を築くうえで、相互文化体験を通して相手の文化的背景を学び、楽しむことはとても貴重です。日本文化といっても自分たちが考える文化と、日本の外で知られている文化が異なることもありましたが、その独特な世界観から多くの気づきを得るきっかけにもなりました。

最終プレゼンテーション

16th Sep 10am – 3.30pm

会議の最終日には、日英の混合グループにより、日英の移民問題の状況と解決策を論ずる４つのプレゼンテーションを行いました。事前学習および会議全体を通して得た学びを用いて、移民問題の原因および現状、独自の解決策を発表しました。日本は英国の移民現状から何を学べるかという点において、低所得労働、人権、メディアなど多様な角度で、国家レベルでの解決策を探りました。

１つ目のグループは「技術力の低い労働力の移動」について取り上げました。イギリス政府の手薄な移民政策は、国民の移民へのマイナスな感情を後押しし、結果的に EU からの離脱へと繋がりました。高齢化が進んでいる日本では、特に低所得労働の移民受け入れにおいて、政府が寛容的ではないことを取り上げ、教育や医療、人種的な壁をどのように乗り越えるかをテーマに、日本がイギリスから学ぶべき点を提唱しました。

２つ目のグループは、「移民の人権侵害」について取り上げました。日本の政治において、移民に選挙権がなく、自分の意見を表明する方法が十分ではないことを指摘し、それらへの改善策を提案しました。

３つ目のグループでは、「メディアの移民に対しての脚色」に焦点が当てられました。テレビでは中立性にかけること、そしてSNSでは簡単に憎悪や誤った情報が拡散してしまうことが問題点としてあげられました。よって、メディアによる印象操作と偏見報道を個人が認識し、メディアリテラシーを向上させることが必要だと提唱しました。

４つ目のグループは、日本のインターンや研修において労働者から搾取が行われていること、イギリスへのコントロール不可能な移民の流入について問題視しました。そして、これらの点において、日英両国の政策を時代に合った新しいものに変えていくべきだという考えが述べられました。

まとめワークショップ

14th Sep 9am - 12pm

本会議は13日をもって閉会したものの、最終日の１４日にまとめワークショップを開催しました。内容は、「バベルの学校」というドキュメンタリー映画を鑑賞し、各々の意見を述べることで移民問題への捉え方を考え直そうというものでした。「バベルの学校」は、２０１５年に公開されたジュリー・ベルトゥチェリ監督作であり、ドキュメンタリーとして移民個人の持つ物語にフォーカスを当てている作品です。舞台はフランスの首都パリの中学校。そこには自国の政治的、または家庭の経済的な理由でフランスへ渡った生徒が通っていて、１クラス２４人で２０の国籍という多様性を持っています。お互いの言語や宗教などの文化違いを乗り越えながらも、生徒自らがフランス社会に適合するために奮闘する日々がとても印象的でした。

ある参加者からは、本会議では移民問題に関して大きなテーマで取り組んできたが移民問題を移民という社会の枠組みとして捉えると同時に、その背景にある一人一人の語られない物語があることを常に心に留めておく必要がある、という意見がでました。移民問題についてはもちろん、これからのグローバル社会で、多様性をどう受け止めていくべきなのかを改めて考えさせられたワークショップでした。

8 終わりに

Epilogue

参加者の声

“参加者の多様性も手伝って、様々な角度から日本とイギリスが抱える問題をじっくり考えることができました。「日本人」「イギリス人」という枠にとらわれることなく、１人の人間として、みんなと対等に議論できたのではないかな、と思っています。頼もしい仲間ができて、本当に参加してよかったです！”

“私は看護学生として参加させていただきました。日英の移民問題について、事前学習や講義、ディスカッションから多くの学びを得るとともに、そこから発展させて外国人診療や移民の健康格差など、医療の視点からも考察する貴重な機会となりました。ありがとうございました。”

“この会議は異なる文化やバックグラウンドを持つ学生が集い、それぞれのアイディアや意見を共有することができる貴重な場でした。白熱した議論から国際的な社会問題を考えたり、それらの問題解決に向けて皆で多角的に考えることの大切さを学んだりすることができ、とても有意義な一週間でした。”

謝辞

第２回日英学生会議の開催にあたり、私たちの活動をご理解いただいた多くの皆様のお力添えをいただき、無事全日程を終えることができました。特に、協賛していただいた株式会社ベネッセコーポレーション、助成していただいたグレイトブリテン・ササカワ財団、双日国際交流財団、三菱 UFJ 国際財団、後援していただいた在日英国商工会議所、日英協会、及びご登壇いただいた Dr Andall, Dr Hallman, 株式会社フラミンゴの方々、IOM 東京事務局の清谷様、また、会場及び宿泊施設を提供していただいた国立オリンピック記念青少年総合センターの皆様をはじめ、全ての方々に心より感謝申し上げます。今後ともご指導、ご鞭撻のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。

― 日英学生会議実行委員一同